



イタチ：関

# わいるとらいふ

Wildlife

No.34

2014年3月25日

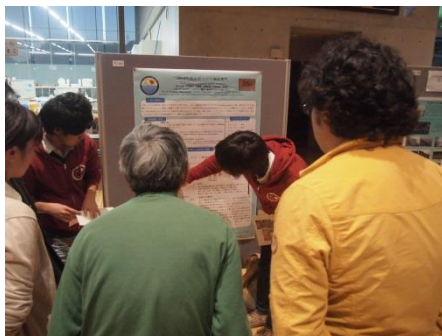
NPO法人 宮崎野生動物研究会

Miyazaki Wildlife Research Group

## 「第24回日本ウミガメ会議 in 牧之原」を終えて

日本各地でウミガメの保護や研究に携わっている人たちが学生を含め、皆が年に一度集結して知識や交流を深める「日本ウミガメ会議」の第24回が、昨年の11月22～24日に静岡県牧之原市で開催され、私も宮崎から一人参加することができました。到着したのが23日の午後だったため全国各地のウミガメ上陸・産卵地の現状報告会には間に合いませんでしたが、その後のシンポジウムやポスター発表などに参加することができました。今回のシンポジウムのテーマは「移植」と「砂浜」という現地で活動している人たちの多くが直面している問題が取り上げられました。

移植が必要になったのはなぜなのか。砂浜の減少が主な原因として挙げられているが、その対処法としてどのようなことが行われているのか。皆が一つのテーマに集中して議論するのは非常に有意義なものになりました。今回解決策を見つけることはできませんでしたが、こうやって議論されることに意味があると感じています。ポスター発表の方では学生も多く発表しており、ストランディング個体の調査結果や性ホルモンなどの専門的な要素に着目した研究発表などが行われており、新たな分野を知るいい機会となりました。



シンポジウムなども盛り上がりますが、この会議一番の楽しみは夜の懇親会です。発表の時間だけではできなかった質問をしたり、長年現地で頑張っている方のお話を聞けたりと、全国各地から人が集まるからこそできることがここにあります。私自身、これが楽しくて毎回会議に参加しているようなものです。

宮崎市で行われた第20回大会から田原一沖永良部一志布志と毎年参加させていただき、いつの間にか今回で5回目の参加となり、学生の中で最上級生となってしまった最後のウミガメ会議。また、今回は第1回の開催から今日までウミガメ界のトップを走り続けられたウミガメ協議会の亀崎会長が会長を降りられるということで、色々と特別な会議となりました。

第25回大会は今年の11月28日(金)～30日(日)に鹿児島県奄美市で開催予定です！年に1回です！全国各地から皆さん参加されます！特に学生の皆さん、仲間たちがいっぱいいますし、現地で活躍される諸先輩方の話はすごくためになります。旅は楽しいですよ♪もっともっと宮崎から



らも参加していきましょう!!

山本 達哉

野生研からのお知らせ

# 2013年度のウミガメの調査結果がまとまりました

先のわいるどらいふ No.33 で、2013年アカウミガメ調査結果をご報告しましたが、この度、新たなデータを加え、宮崎海岸の最終調査結果がまとまりました。

当研究会が調査を行う区域のアカウミガメの上陸回数は2,716回、産卵回数は1,781回となりました。このうち宮崎地区の天然記念物指定地区の上陸回数は1,254回となり、昨年より若干の減少ではありますが、昨年同様に高水準を保っています。詳細表をご覧ください。

なお、表で網掛けしている部分が指定区域です。▲は、昨年より減少を表しています。

また、宮崎県全体では上陸回数が3,407、産卵回数が2,215との報告があります。

	月別	上陸回数	産卵回数	戻り回数	移植巣数	標識数	調査死生	上陸前年比	調査距離
堀之内	5月	24	20	4	5	0		7	3.0
	6月	59	35	21	25	0		▲15	
	7月	65	59	36	30	0	1	▲17	
	8月	7	4	3	0	0	1	▲12	
	合計	182	118	64	60	0	2	▲37	
新富北	5月	42	35	7	19	0		▲2	2.4
	6月	84	67	17	5	0		▲46	
	7月	137	112	25	3	0		▲43	
	8月	29	24	5	0	0		▲6	
	合計	292	238	54	28	0	0	▲97	
新富南	合計	442	349	93	74	0	1	▲51	2.7
	合計	151	85	56	1	0	1	50	0.5
大炊田	5月	23	21	2	1	2		0	2.2
	6月	92	66	26	2	10		▲1	
	7月	124	74	50	1	14		▲14	
	8月	20	14	6	0	1		5	
	合計	259	175	84	4	27	0	▲10	
明神山	5月	72	43	29	12	5	2	14	1.8
	6月	147	101	46	28	11	1	▲55	
	7月	169	120	49	20	9		▲51	
	8月	22	11	11	0	0		2	
	合計	410	275	135	60	25	3	▲90	
住吉	5月	12	2	10	1	1		▲18	0.8
	6月	51	11	40	0	3		▲29	
	7月	37	11	26	3	2		▲41	
	8月	5	1	4	1	0		4	
	合計	105	25	80	5	6	0	▲64	
一ツ葉	5月	4	3	1	0	0	1	3	2.0
	6月	7	5	2	0	0		▲11	
	7月	39	28	11	1	0		3	
	8月	20	14	6	0	0		11	
	合計	70	50	20	1	0	1	6	
人工ビーチ	合計	7	4	3	1	0	0	▲11	0.7
大湊川	合計	41	34	7	5	0	0	38	0.2
安濃北浜	合計	58	34	24	8	0	0	2	1.2
松崎	5月	38	27	11	4	3	1	25	4.0
	6月	105	62	43	6	3	1	24	
	7月	197	105	92	1	17		87	
	8月	40	21	19	0	1		15	
	合計	380	215	165	11	24	2	151	
運動公園	5月	12	7	5	0	1		▲14	2.3
	6月	57	35	22	6	4	1	▲2	
	7月	51	29	26	2	1		7	
	8月	10	5	5	0	0		▲21	
	合計	130	72	58	8	6	1	▲30	
こどものくに	5月	10	4	6	1	1		▲12	1.5
	6月	56	32	24	3	3		10	
	7月	90	45	45	0	6		30	
	8月	8	5	3	0	0		▲7	
	合計	164	86	78	4	12	0	21	
青島	合計	0	0	0	0	0	2	0	0.5
白浜	合計	25	21	4	3	0	1	▲16	0.3
小内海	合計	0	0	0	0	0	0	0	0.3
全体	5月	284	197	87	54	13	7	▲37	26.4
	6月	866	582	284	122	34	4	▲209	
	7月	1301	840	461	95	51	2	37	
	8月	264	161	103	2	2	1	51	
	9月	1	1	0	0	0	0	▲1	
	合計	2716	1781	935	273	100	14	▲139	



## 動物しつもん箱



【質問】 どうしてハトは歩くとき首を振るの？

(日南市 Tさん)

【答え】 ハトが歩いている姿をよく観察すると、歩くのに合わせて首を前後させていることがわかりますが、これはハトが周りの景色をちゃんと見るために編み出したやり方なのです。私たち人間は目玉が動かせるため、首を降らなくても景色を広く見ることができますが、鳥類はほとんど目玉を動かすことができません。そのため、ハトは少しでも景色をよく見るために首を前に突き出し、脚をけて体が前に動くのに合わせて、首を縮めていき、これ以上は縮められないという限界に来たら、また前に突き出すという動作を繰り返します。この動作によりハトは後ろに流れる景色をじっくりと見る事ができるのです。

(中林 朗)

【質問】 カンガルーの赤ちゃんっておしっこやうんちはどうしているの？

(宮崎市 Mさん)

【答え】 皆さん知ってのとおり、カンガルーの赤ちゃんはお母さんカンガルーのお腹の袋の中で育ちます。生まれたばかりの赤ちゃんがお母さんのお腹の中の乳首に吸いつくと、乳首の先が膨らんで赤ちゃんの口が外れなくなります。そして乳首は赤ちゃんの成長とともに長くなり、赤ちゃんの食道にお乳を送り続けるのです。口が外れないとなると、赤ちゃんがしたおしっこやうんちは袋の外に出すことができません。そこでお母さんカンガルーは、舌で赤ちゃんの排泄器官を刺激して排泄を促し、そのままおしっこやうんちを食べてしまうのです。このおかげで、袋の中におしっこやうんちが溜まる心配はありません。一方でカンガルーと同じ有袋類であるコアラは、赤ちゃんがお母さんのうんちを食べて、消化に必要な微生物を分けてもらっています。一部の動物では、このように排泄を通じたお母さんと赤ちゃんとのつながりが重要な命の営みとなっているのです。

(中林 朗)



## 七面鳥がサル退治



「ドゥル、ドル、ドル…」低いもの音が山の谷間にこだましていました。いったい何だろうと不思議に思った私は、山の中腹に大きく広がるミカン畑に目を向けました。そこには紅い顔をし、尾羽を立て、羽を引きずり、足で地面を叩き、鳴きながら集団で近づいてくる七面鳥がいました。その異様な姿に私まで驚いてしまいました。なんと、これがミカン畑の用心棒だったのです。実はここ、日南市の宮浦は昭和50年頃からポンカン、日向夏の生産地として開発された、県内唯一の果樹園でした。ところが果樹園を作った頃は一頭もいなかった野生猿が最近現れ、この広いミカン畑はサルの被害にあっていたのです。農家の人達はそれからというもの、サルの退治に知恵を絞りました。例えば、ガスの爆音機で大きな音を響かせてみました。でもサルは、音だけとわかると平気で暴れ回りました。次にイヌを持っていきましたが、木に登るサルには手も足も出ませんでした。とうとう、農家の人達は収穫期になると交代で留守番をすることにしました。しかし、サルは何時に出てくるかわかりません。それに、女の人や子供には恐れず、平気でミカンを取っていくので参ってしまいました。最後の手段に、猟銃

で駆除する事にしましたが、目や頭のいいサルは銃に気がつくや忍者のように山に隠れてしまう始末で、サル退治にはほとんど困り果てていました。そこに現れたのがこの助っ人、七面鳥でした。不気味な鳴き声か、それとも鬼のようなアオやアカの顔色の七面鳥にあの知患者のサルたちも、驚いたのか寄りつかなくなっていました。それで今年は安心して収穫が出来るかと農家の人も喜んでいました。

それにしても、サルの被害はここだけでなく県内各地で起こっています。なぜサルの被害がこんなに多くなったのでしょうか。それはニホンザルが保護動物に指定されて以来、サルが増殖しすぎたのだ、という人が多いのですが、実はサルの繁殖率は他の動物に比べて低く、自然の場合、出産率との死亡率がほとんど同じでバランスがとれ、群れの数も変わらないです。ところがサルで有名な大分県の高崎山のサルのように、観光用としてエサを与えられると数倍以上に繁殖し、また寿命も延び、急激に増殖現象が起きている…。そんな現象が今、各地で起こっているのです。それは、山林がスギやヒノキの人工林にされ、彼らは生活が出来なくなり、そこでサルたちも新開地を開発するため、ぐるぐる回っている間に農作物の味を覚え、サルたちは危険を冒してもこれらを食べることになったのです。栄養豊かな農作物は、結局サルの増殖につながり、被害が大きくなるようになりました。ここミカン畑も、人間が開発した結果なのです。でも、何とかして人間とサルが仲良く共存出来ないものかと考えている私は、サルを追いやる助っ人が鉄砲でなく七面鳥ということで、ほっとしました。

竹下 完

## 宮崎県のカタツムリ 3

人家付近にいる馴染みのカタツムリにウスカワマイマイがいます。花壇や畑で出たばかりの新芽や花を食べる嫌われ者です。ウスカワマイマイは殻が薄く軟体の色が透けて見えます。軟体は黒色から淡褐色まで変化が大きいので別の種類のように見えます。次の写真は黒色と淡褐色のウスカワマイマイが交尾をしているところです。



軟体がまだら模様のももいます。



カタツムリは雌雄同体のものが多く、ウスカワマイマイもその一つです。交尾をすると両方も卵を産みます。子孫を残すためのうまい仕組みです。

宮崎県には普通のウスカワマイマイの他にオオスミウスカワマイマイがいます。ウスカワマイマイに比べて大型で殻が少し厚いです。

一番の違いは臍孔と呼ばれる殻の底面中心部にある穴です。ウスカワマイマイでは臍孔がほとんど閉じているのに対してオオスミウスカワマイマイでは臍孔が明らかに開きます。



ウスカワマイマイ      オオスミウスカワマイマイ

オオスミウスカワマイマイは宮崎県では、今のところ青島地区でしか確認していません。

人家付近には小豆に似た大きさ、色、形のアズキガイがいます。これはウスカワマイマイのように新芽を食べたり、花を食べたりはあまりしませんが、生息条件が良いと大量に発生することがあり、その時は何でも食べてしまう勢いです。

普通のアズキガイは赤褐色ですが、時にアルビノの白いアズキガイが見られます。



陸に棲む貝であるカタツムリでも、海に棲む貝でもアルビノは出現しますが、珍しいと言えるでしょう。

西 邦雄

## デジタルタヌキ(No4)

前回の記事に、デジタルタヌキプログラムでは複数種、複数個体が同時に動き回るようにできたことを書きました。もう一つやりたかったことは、河川敷の環境を時系列に沿って変化させた時、ここに棲む動物たちがその環境変化に応じてどのように行動パターンを変えて行くかを、シミュレーションすることでした。

このためには、まず、河川敷環境の変化モデルを作る必要があります。河川敷の環境は二つの要因で変わります。一つは出水で、もう一つは植生の繁茂です。出水による環境の変化の後付けは結構やっかいです。というのは、小さな出水ですと河川敷の地形は変わることはありませんが、中程度の出水ですと、土砂がたまります。もっと大きな洪水ですと、土砂が削りとられます。さらに、大出水時には、河川敷内の流速分布に応じた土砂の動態への考慮も必要です。すなわち、河川の中央近く（みお筋といいます）の土砂は削られますが、堤防近くでは流速が低くなりますので、土砂が堆積します。このような予測をするためには、河川敷内の地形に応じた流速分布を計算しなければなりません。実は、河川工学の分野ではこのような計算プログラムがあって、それを河床変動計算モデルと言います。今回はそれを借用することにしました。

もう一つの問題は、植生の繁茂状態の時系列変化を予測することです。このためには、植生の遷移速度を知ること、次に出水時の流速に応じた植生の破壊の程度を知ることが必要です。遷移速度は、私達の10年間にわたる北川の調査で、ほぼ分かっていました。裸地になって約2年後から草原が発達し、4年後から灌木が生え始め、8年も経つと樹高が7mくらいのりっぱな柳林になります。さらにこの植生の発達速度は、堆積する土砂の厚さと性質によっても違います。堆積量が少ない場合、質量の軽いシルト（泥）や植物由来の堆積物（デブリといいます）が溜まりやすく、植物の発育を促します。厚いと完全に植生を埋めてしまい、そこの植生は一から出直しです。このような変化モデルは国土交通省国土技術政策総合研究所の福島さ

んを中心とするグループにお願いしました。

さらに、この河床変動と植生変化モデルを動かすためには出水モデル（シナリオ）が必要です。どのような間隔で、どの程度の出水がやってくるかのシナリオです。これについては私達の北川フィールドの2000年以降の出水履歴を使うことにしました。うまいことに、2004年、2005年に大出水があり、河床の地形と、植生が大きく変わった経緯があったためです。

このシナリオで上記の2モデルを走らせ、様々な微調整をして、やっと実際に近い河床地形と植生変化をシミュレーションできるようになったのが、研究期間が終わる約半年前でした。しかし、後は、植生分布に応じた私達の動物行動予測モデル（いわゆるデジタルアニマルプログラム）を走らせるだけです。私達は、とりあえずタヌキを2匹、ウサギを2匹この河川環境変化のモデルに乗せることにしました（図参照）。これで、年々植生環境が変わったら、彼らがどの場所を頻繁に使い、どの場所を使わなくなるかを知ることができます。残念ながら動物の繁殖による個体群変化の要素はまだ入っていません。

私達はこれら河床変動＋植生変化＋動物行動モデルの1セットを、河川生態系変動予測モデルという大げさな名前を付けたのですが、いかがでしょうか。最初の号で述べたように、これに河川改修工事の影響を乗せることもできます。以上で、デジタルタヌキの記事は終わりにします。お付き合いありがとうございました。

岩本 俊孝

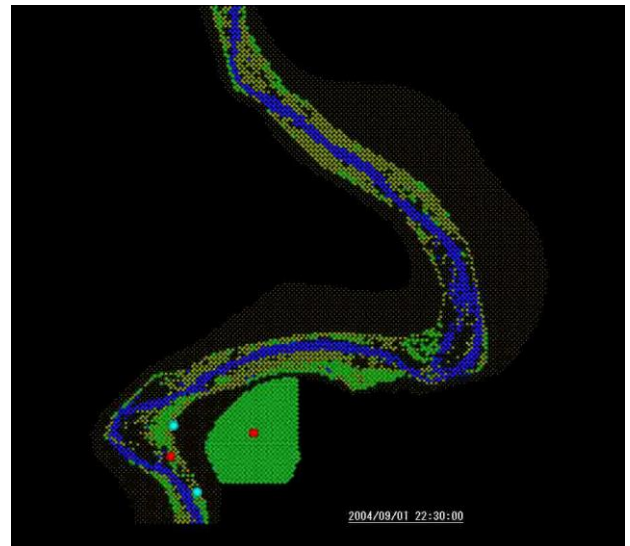


図 赤丸がタヌキ、水色丸がウサギ。黄色のエリアが草原、緑のエリアが灌木を示す。



## 企画展「みんなで考える 環境保全 in 宮崎」の開催

宮崎市フェニックス自然動物園では、ヤギの大作進に始まり、ワオキツネザルのお食事タイム、日に3回実施しているフライングフラミンゴショー、チンパンジーの知能実験、ソウさんのお散歩と記念撮影など日々いろいろなイベントを行っています。これとは別に、パネルやお話しを中心とした期間限定の企画展も行っています。

2013年秋には新たな取り組みとして、動物園単独ではなく、宮崎にある環境保全団体「宮崎ハマユウ会」やNPO法人宮崎野生動物研究会、NPO法人ボルネオ保全トラストジャパ(BCT-J)、宮崎大学と協力して、「みんなで考える環境保全 in 宮崎」と題した企画展を実施しました。

このイベントは、11月17日から24日まで開催し、国内の動物園水族館の研究や取り組みに関するポスター（写真）や、各団体の活動が描かれているパネルを掲示し、来園者に紹介しました。また、11月17日、23日、24日にはBCT-Jによるワークショップが行われました。ここでは、映像を使ったボルネオの現状と団体の活動紹介、来園者に参加していただく〇×クイズやボルネ



オの野生生物の写真を使った缶バッジ作り体験などで盛り上がりました。

さらに、11月23日には講演会を開催しました。講演会では、まず宮崎市フェニックス自然動物園の出口園長による「動物園の役割と宮崎市フェニックス自然動物園の紹介」と題してお話ししていただきました。引き続き、宮崎大学の副学長で、NPO法人宮崎野生動物研究会の理事長であ

る岩本先生と宮崎大学農学部教授の森田先生にお話をさせていただきました。また、BCT-Jでは、理事である私とその活動報告をしました。



特に、岩本理事長からは、「宮崎野生動物研究会の活動」について、ウミガメとカモシカの話をしていただきました。



していただきました。当研究会が関わっている宮崎の野生動物の代名詞・アカウミガメの調査活動

では、当研究会の会員である宮崎市フェニックス自然動物園の飼育員が調査活動の服装と装備を持って現れました。

また、九州の宮崎、熊本、大分の3県にまたがり生息しているニホンカモシカでは、調査活動で使うヘルメットをかぶった岩本先生によって、カモシカの厳しい現状が報告されました。

BCT-Jからは、東南アジアに浮かぶ生物多様性の宝庫であったボルネオ島がアブラヤシのプランテーションによる開発によって荒廃し、そこに棲むオランウータンやボルネオゾウなどの野生動物が悲惨な目にあっていること、それらを打開するための活動が紹介されました。

今回の企画展は、事前の準備不足と広報不足で、多くの参加者を集めることができませんでした。しかし、参加された方々からは、「おもしろかった。」「ためになった。」との感想が聞かれました。今回に懲りず、多くの方々に身近な自然で起きている問題や地球のどこかで起きている環境破壊などについて知っていただき、環境保全につなげられたらいいなあと思っています。

竹田 正人

## ウミヘビのストライピング

2月4日、国土交通省の宮崎海岸出張所から「1月20日に佐土原の大炊田海岸にウミヘビが上がった」との情報が寄せられました。このウミヘビは「エラブウミヘビ *Laticauda semifasciata*」の雄個体だと思われます。

この種は東南アジアから東アジアの黒潮の流路に沿うように分布する種で、琉球が繁殖個体群の分布の東北限となっており、鹿児島県の口永良部島や硫黄島には最東北限の産卵場が知られています。生体の漂着記録は本土沿岸から極東ロシア周辺でも知られています。多くは明らかに弱って漂流してきた個体で、今回の宮崎海岸のものもそうした例でしょう。

沖縄では古くから食材として利用されていますが、有毒です。非常に大人しく口も小さいため、噛まれることはほとんどないといわれていますが、捕まえようとする噛んでくる可能性もあるので、無闇に触ったり近付いたりしないよう気を付けてください。

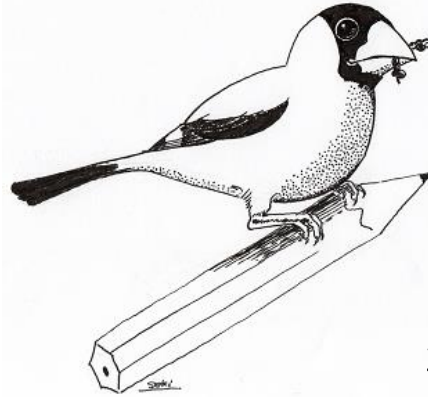


大炊田海岸にあがったエラブウミヘビ  
写真：国土交通省宮崎海岸出張所提供

今後も目撃情報がありましたら、宮崎野生動物研究会までご連絡ください。

古根村 幸恵

## イカルさんのおはなし



渡部 千尋

皆さんは身のまわりにどんな鳥が住んでいるか知っていますか？スズメやカラスなどの人間の生活に密接に関わっている鳥、ウグイスやメジロなど私たちの目や耳を楽しませてくれる鳥、そんな鳥たちの中でも今回はイカルという鳥についてご紹介します。

この鳥は JR の駅などでお土産物店として入っているキヨスクのマスコットキャラクターになっている鳥でもあります。イカルは宮崎では年間を通じて目撃される鳥ですが、主に春から夏にかけてその姿をよく目にします。特徴的なのは真っ黒な顔に大きな黄色い嘴です。「キーコーキー」と鳴くのが特徴的な鳥ですが、この囀り方が鳥によって少し違うのです。たまに音痴な子がいます。「キーコーキー」ではなく「キーコーキコキョーン」という感じで鳴くのです。毎回実習で現地にいくといつもそのイカルが入り口の近くにとまっていて囀っています。そして繁殖期のギリギリまで囀っているのですが、どうやら昨年はお嫁さんがみつからなかったようです。鳥が繁殖期にモテるかモテないかは囀りによって判断されるのかもしれませんが、これから春になるにつれて皆さんも耳を傾けて囀りをきいてみて下さい。

次は、徳嶺耀子さんをお願いします。

## 野生研のあしあと

平成 25 年

11/30 石崎浜ビーチクリーン参加  
カメの講話(小豆野) 424 名参加

12/17 12 月定例会

平成 26 年

1/13 くまもと自然保護講演会開催  
演題「熊本県内におけるニホンカモシカの生息  
実態と生息数回復への提言」講師：岩本

1/23 1 月定例会

1/25・26 「第 1 回大分ウミガメ会議」が大分  
市で開催。パネリストとして、当研究会の  
竹下前会長が参加。

NPO 法人おおいだ環境保全フォー  
ラムが主催。大分ウミガメ・ネットワー  
クとしての現在の活動報告や今後の大分  
におけるウミガメの保護への取り組みを協  
議したもの。

2/25 2 月定例会

3/2 新富海岸清掃  
新田原基地の幹部会 100 名参加

3/16 宮崎県立図書館にて「宮崎の自然」合同  
研究発表会開催

演題「九州山地及び宮崎県のカモシカ生息状況  
及び保護の課題について—第 4 回特別調査  
を終えて」 講師：岩本

3 月 平成 25 年度宮崎県野生動物植物生息状況  
等調査の報告書を提出

## 新会員のご紹介 (敬称略)

賛助会員：松村 慎一

## 動物記録

平成 25 年

11/30 延岡。深海から珍客—安井沖定置網にサケ  
ガシラ。【夕刊デイリー】

12/1 来年 11 月、奄美でウミガメ会議。国内  
外から参加。今年の第 24 回大会は、静岡  
県牧之原市で開催。【南日本新聞】

12/4 謎の多い鳥「ミソゴイ」危険察知で木の  
枝に変身。宮崎市動物園で本格調査。生息  
環境保全つなげる。【宮崎日日新聞】

12/11 串間のテーブルサンゴ。「沖縄から北上」  
誤りか？宮崎大学調査で遺伝的な違い顕  
著に。【宮崎日日新聞】

12/24 コウノトリ優雅な舞。宮崎市で飛来確認。  
【宮崎日日新聞】

平成 26 年

1/3 串間。岬馬安定繁殖させたい。滑落防止  
柵や餌場拡大。伝貧から回復へ全力。  
【宮崎日日新聞】

1/6 進む温暖化。絶滅へ刻一刻・・・。ホッ  
キョクグマ危機。氷減少、狭まる生活圏。  
【西日本新聞】

1/11 アオウミガメ産卵ラッシュ。小笠原諸島  
13 年の巣数最多。【宮崎日日新聞】

1/24 零下 196 度で生きるヒル。凍結、解凍に  
耐える。東京海洋大のチーム発見。  
【宮崎日日新聞】

1/23 クロツラヘラサギ。奄美で今年も越冬。  
【南日本新聞】

1/31 奄美沖。絶滅危惧のセミクジラ。17 年ぶ  
り。【朝日新聞】

2/3 宮崎大。鳥フル警戒野鳥調査。宮崎市で  
糞や水採取。【宮崎日日新聞】

2/4 ダイオウイカ発見相次ぐ。水温低く海面  
に上昇か。日本海沿岸の広範囲。  
【宮崎日日新聞】

2/11 県北。増えるカワウ。アユへの被害心配。  
内水面漁協対策に頭痛める。  
【夕刊デイリー】

2/14 希少種オオイタサンショウウオ。古城小  
児童が飼育観察。今月から豊かな自然環境  
体験。【宮崎日日新聞】

2/15 ダイオウグソクムシついに命尽きる。絶  
食 6 年目。【南日本新聞】



宮崎野生動物研究会通信「わいるどらいふ」 No.34 2014年3月25日発行

特定非営利活動法人

宮崎野生動物研究会 (Miyazaki Wildlife Research Group)  
代表 岩本 俊孝

<http://www.m-yaseiken.org>



おもちゃ：カメ

「わいるどらいふ」の無断引用、転載、複製を禁止します。